第

## 全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者 (敬称略)

作品名をクリックすると作品ページに移動します。

りの	ボッバキ文具店』 小川 糸 幻冬舎) お会い」をのせる便せん の な の は の は の は の は の は の は の は の は	(体験書籍『ツバキ」	奈良県立畝傍高等学校 二年	【一ツ橋文芸教育振興会賞】
	る)とになれたこと 現」大牟田一美・熊澤英俊 海 山口 進 汐文社 『屋久島発 は一人と		兵庫県立加古川東高等学校 二年	【一ツ橋文芸教育振興会賞】
	0万回生きたねこ』佐野洋子 作・絵 講談社) 生と死を認識するもの	(体験書籍『100]	千葉県立東葛飾高等学校 二年	【一ツ橋文芸教育振興会賞】
	しい図鑑』 長薗安浩 - ゴブリン書房) 「 <b>言葉の森 」を彷徨う</b>	(体験書籍『あたらし <b>津田 朔</b>	東京都 恵泉女学園高等学校 二年	【全国高等学校長協会賞】
1	郎 監修 佐藤誠輔 口語訳 河出書房新社) 遠野物語』柳田国男 『遠野物語』の世界を旅して	体験書籍『口語訳 体験書籍『口語訳	宮城県仙台二華高等学校 一年	【全国高等学校長協会賞】
	ワランツ・カフカ 池内 紀 訳 白水社) <b>蚊と変身</b>	体験書籍『変身』フ	茨城県立水戸第一高等学校 一年	【文部科学大臣賞】

ツ橋文芸教育振興会賞】

愛媛県立松山東高等学校

沖田英里

(体験書籍『芽むしり仔撃ち』大江健三郎

新潮社

生のかたち

ツ橋文芸教育振興会賞】

智辯学園?

和

歌山高等学校

二年

(体験書籍『棒を振る人生

清水愛萌

人生 指揮者は時間を彫刻する』 佐渡 音楽は神様からの贈り物

佐渡 裕

PHP研究所)

16

18

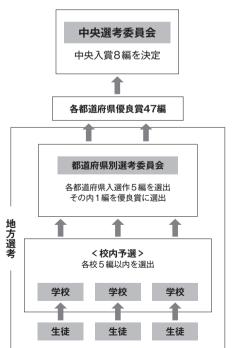
# 「高校生読書体験記コンクール」について

第39回の本年度は、 のように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。 ることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、ど とともに毎年実施している事業で、 全国高等学校長協会、 このコンクールは、 公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、 全国47都道府県から49校の参加があり、 各地の新聞社、 多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつく 集英社などのご後援をいただき、「高校生のための文化講演会 応募作品は92、591編となりました。 文部科学省、 全国都道府県教育長協議会、

### 【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、 5編以内が選ばれ、 都道府県別の応募先に提出されました。 各学校の校内予選により
- 委員会に送られました。 5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選者 都道府県別選考委員会において、 「都道府県入選
- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、 ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。 委員会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・ 中央選老

### 【作品の応募と選考の流れ】



### 賞

### 中央入賞 8名

·文部科学大臣賞 1 名 賞状·楯·記念品

全国高等学校長協会賞 2 名 賞状・楯・記念品

一ツ橋文芸教育振興会賞 5 名 賞状・楯・記念品

\*中央入賞者8名と付添い教師(各1名)を東京へ招待し、 表彰します。

\*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、 「集英社文庫10冊セット」を贈呈します。 楯および

### 優良賞 39名 賞状·記念品

\*優良賞受賞者在学の3校には「学校賞」として「集英社文庫 50冊セット」を贈呈します。

### 入選 187 賞状·記念品

\*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈 呈します。

### 【中央入賞者表彰式】

2020年1月27日(月) 東京・水道橋 東京ドームホテル

### 【中央選考委員(敬称略)】

登(作家

辻原

穂村 角田光代 (歌人) (作家

長尾篤志 (文部科学省初等中等教育局主任視学官)

小林正人 (全国高等学校長協会)

### 主催

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

### 【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校 長協会・集英社

熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社 南日本新聞社・琉球新報社 高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社 中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・ 京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社 福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社 秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社 北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社 日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社 産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎 愛媛新聞社

### 地方主催

北海道高等学校文化連盟図書専門部·青森県高等学校 文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

### 【文部科学大臣賞】 蚊と変句

りを繰り返していた。そのとき蚊が右腕の た。全然考えがはかどっていなかったのも てながらとび、今度は左腕にとまってき 手で払っても蚊は僕の周りを不快な音をた あたりにとまっていることに気が付いた。 も頭がはたらかなくて思考がいったりきた 座った。考える意志はあるのだが、どうに ほとんど寝そべるような格好でソファに んだか釈然としない気持ちを整理しようと、 『変身』を読み終えて本を閉じた僕は、 な

> が、蚊は無事に殺せたようだった。僕は僕 ピク動いている蚊をティッシュにくるんで 叩いたところが赤みをおびてひりひりした 手を蚊にめがけておもいっきり叩きつけた。 腕を刺して血を吸い始めるのを待って、右 捨てた。 から吸ったであろう血をとびちらせてピク

ぜかさっきの蚊のことが頭について離れな 苛立ちをつのらせたが、ふとこの蚊がグレ い。死んでなおつきまとう蚊のしつこさに またどっぷりとソファに腰かけるが、な

相まって少し苛ついてきたので、蚊が僕の

茨城県立水戸第一高等学校 一年

### 池

ーゴルのように憐れにも虫に変身してしま った人間だったならという考えが浮かんだ。

に対して、グレーゴルの最期は実に人間的 う。同じ虫として死んだのにどうしてこう 蚊の最後がただの虫の死にすぎなかったの う一度読み直してみた。そして気付いた。 も違ってくるのだろう。 に満ちた最期が全く違うものに見えてしま っけない死に様とグレーゴルの静かで哀愁 その疑問を解消するために『変身』をも しかしどうにもうまくいかない。蚊のあ

日毎に人間のそれとはかけ離れていって、日毎に人間のそれとはかけ離れていって、彼が死んだ晩には「もう縁切りにしなくちゃ」ならない「へんな生き物」という存在にまで成り果てたというのに、グレーゴルにまで成り果てたというのに、グレーゴルであの姿は、来るべき最期をやすらかな気持ちで待つ、衰えきった哀れな人間そのものだった。

ではないだろうか。
しかし考えてみればそれは当然のことだ。
に固い背中をもっているだけの人間なのだ。
に固い背中をもっているだけの人間なのだ。
に固い背中をもっているだけの人間なのだ。
く、彼を虫として扱う周囲の人間だったの

イムを箱の中にぎゅうぎゅうにつめると一つ一つのスライムの形を操作することは困つ一つのスライムの形を操作することは困ってしまってしまっ。グレーゴルはすでに人格が固まっていたのに、彼の外見が虫になったことによる衝撃で周りのスライムが形をかえ、虫の枠にねじこめられたから困惑し懊悩したのだと思う。僕が思うに変身とはグレーゴルの姿が虫になったことではなく、彼をとりまく環境が虫用のものになったことをさすのではないだろうか。

そう考えると引越や進学などによる環境の変化も、大きな意味でとらえれば変身なのだから変身は万人に起こることだと言える。そしてその変身に上手く順応できないは自ら死を選んでしまったりする。グレーゴルがそうしたように。

人が虫になるという突拍子もない出来事のかもしれない。

考えて目を閉じた。 のまにか眠りについていた。 にだけは御免だと思った。そうして、 応できたようだった。これからもいろいろ じだったのかもしれないな、なんてことを に変身した前の晩ももしかしたらこんな感 間に体をすべりこませた。 も雑にみがくとうすいかけ布団とベッド ていた。シャワーを烏の行水ですませ、 るかった空も暗闇にとけて星が点々と輝 な変身をしなくてはならないだろうが、 て、四月九日に起こった変身にも上手く順 身』を読み始めたときにはまだほ 気がつけ がば時刻は12時を回 高校生活にも慣れてき グレーゴルが虫 っていて、 h 0) ŋ 0 虫 0

そんなことはなかった。ない虫に変わっているのに気がついた。たところ、ベッドのなかで、自分が途方もたところ、ベッドのなかで、自分が途方も

『変身』フランツ・カフカ 池内 紀 訳

### 第 39

### (全国高等学校長協会賞)

宮城県仙台二華高等学校 一年

### 井崎英里

色がとても近く感じられる。手を伸ばせば出発した電車は北へと進路をとった。小牛田、一ノ関、花巻と乗り換えた私は、かつて柳田国男も訪ねた岩手県遠野市を目指して柳田国男も訪ねた岩手県遠野市を目指したなっていた。小さなマッチ箱のような電をなっていた。小さなマッチ箱のような電が出入されていた。小さなマッチ箱のような電が出入されていた。小さなマッチ箱のような電がとなっていた。小さなマッチ箱のような電が表した。

の扉の前へとやって来たのだ。語』の世界への入口である。私は再び、そ変わっていた。ここが私の目指す『遠野物変わっていた。ここが私の目指す『遠野物の扉の前へとやって来たのだ。

農作業をしていたおばさんが腰を上げ、というで物語の世界と重なる。かつての柳田もこんな気が出し先走る。かつての柳田もこんな気が出し先走る。かつての柳田もこんな気が出し先走る。かつての柳田もこんな気があるであるである。

沢賢治が物語の世界で描いた「めがね橋」枝に届きそうな木々のトンネルを抜け、宮

冬の遠野を訪ねたいと思い、今回は三月を選んだ。昨年の夏に続く二度目の訪問である。この時期雪がないのは珍しい、と遠野の方々は話していたが、やはり寒いだけ野がさは優しく、心の奥にまでその温もり生が、水が、全てが冬に染まり、囲炉裏の土が、水が、全てが冬に染まり、囲炉裏のまがさは優しく、心の奥にまでその温もりを届けてくれた。

は柳田と同じルートで遠野を目指した。それを広めた人が、柳田国男である。今回野物語』と名付けられ、世界へと広まった。岩手県遠野市。ここで生まれた話が、『遠

紅白の 聞いた。そして夜には商店街全ての店先で、 と呼ばれ、 たと言う。 たのだろうか うな信仰や文化を、 私は目を奪われた。 送り火が焚かれた。 後長さを短くしながら三年間続けられると 旗の長さも亡くなった年が一番長く、その った。風に揺れる紅白の旗 ている。 田 は 旗を高く掲げ、 丁度お盆の時期で、 白が男性、 私が初めて訪ねた日も送り盆だ 九〇九年夏に 柳田 遠野に残されたこのよ 初めて見る伝統行事に、 赤が女性を意味 死者の魂を招いてい 初め はどのように捉え 版は、 新盆の て遠野を訪 「灯籠竿 家では、 ね

きる。 間話や噂話も数多く、 実際に遠野の町に存在し、 ろに…」で始まる昔話とは違 遠野に残された話とは、 登場人物も大方はっきりしている。 昔話ではなく取材記事なの 話に登場する場所 訪ねることが 昔 々あるとこ 時も場所 世 が

とは、 善より聞き、 なのだろう。 田 野物語』だ。 地 はこれらの話を遠野出身の佐々木喜 佐々木の話を見聞きする。 元の誇りであり、 書き出したもの 私が紹介された遠野の語り 遠野 の町を歩い 遠野が生 が、 私も読ん エんだ偉 ている 佐々木

> 葉が、 部である大平悦子さんは、 の魅力なのだと思う。 向かって届けられること。 していた。息子へと伝えられた佐々木の言 佐々木の三男、 大平さんを通し、 佐々木光宏だったと話 時を超えて今私に それが真の民話 小学三年 の担 任

> > 出

遠野には、 む冷気と、 西様に所狭しと結ばれた赤い布。 そして私の知る物語に、 する数々の名所を訪ねた。 純粋な心で向かい合えば、 ら誰かがこちらを窺っている眼差しの気配 るオシラサマの裏の部屋から、 を前にすると、そこに存在する不思議 ることができるのだ。 木陰より感じる視線や、 加わる。 2 私は二 足音が聞こえた気がする。 見えない何かをふと感じる瞬間がある つの話が短い。 デンデラ野を駆け抜ける風。 回の訪問で、 不思議 どこからとなく響く沢水の音。 な世界の住 物語に登場する場所 「遠野物語」 カッパ淵の水中か 色や匂い、 その気配を感じ 『遠野物語』は、 人が存在 五百羅漢を囲 幼い子ども 鎮座され 一に登場 温度が 卯子 な世

る広瀬川に残された伝説の数 、 る。 この夏私は姉と共に、 三原良吉氏を初めとする多くの先人 元仙台 々を調査して 市 を流

> 上がり、 まれ、 った。 存在していたのだ。 くから地 り継がれてゆくうちに、 によって語り ら今に続く人々の、 の鍵を発見したの の方々の 不満までもが上手に育まれたのだろう。 全国各地にある数々の伝説や物語は、 。遠野物語』や広瀬川伝説だけでは 「向き、 育ち、 仙台にも遠野のような世界が その中に人々の願 残された石碑の文字や、 元に住む人々の話を聞 本を参照する一 継がれてきたものである。 名前も知れない無数の語り手 かもしれない。 長い 遠野への旅 方で、 暮らしの中から生 面白可笑しく膨 いや夢、 直接現地 く活動を 不平 それ 私はそ 確 昔か か Ŕ n 語 は

名も無き語り手の一 しめき合ってい や精霊の話が、 を超え、 り手たちに思いを馳せた。 いと思う。 仙台へ帰る電車の 彼らによって紡がれた多くの る。 小さな一 人として後世に残した この物語を今度は私が 屯 冊の本となってひ 私は名も知れぬ 時間という空間

後藤総一郎 語訳 遠野; 物語 佐藤誠輔 河出書房新社 口語訳

### **|全国高等学校長協会賞**

## 言葉の森」を彷徨う

恵泉女学園高等学校

時間内に感想を書かなければいけない時は さを求められることが苦手だった。学校で、 ではなかった。特に、言葉にするまでの速 な場面で言葉を使って表現することが得意 求められる。私はずっと、こういった様々 校では課外授業のたびに感想を書くことを では記述式の試験が導入される。また、学 の言葉で情報が飛びかっている。大学受験 求められていると思う。SNSでは世界中 今、世の中は言葉で表現することを常に

> 思い続けてきた。書いている時、常につき 国語のテストで記述問題を見れば後回しに まとう「何か気持ち悪い」という違和感が ことが嫌いだった。 ぐだという感じは拭いきれず、そう感じる っていることと自分から出た言葉がちぐは た文章を書くことをできるだけ避けたいと したくなる。自分の言葉を使ってまとまっ つも私の筆をとめてしまった。自分が思

とだ。私は初めて原爆ドームを見た。ガイ 例えば、平和学習で広島を訪れた時のこ

とまらず、いっこうに言葉にできないまま

きまって用紙が半分埋まるかどうかであり、

自分が感じたことを言葉にできていなかっ 間、私はただただ原爆ドームを見上げてい ドの方の説明を聞きながら見て回っている な感情を表す言葉がよぎったが、どれもし たからだ。確かに「何か」は感じた。様々 その輪の中に入らなかった。その時はまだ、 囲では友達が感想を言い合っていたが私は ていたより遥かに大きかった。見学後、 た。原爆ドームは教科書の写真から想像し っくりはこなかった。感じた「何か」はま

腐なものだった。書かれていることはただ 図鑑」をつくり始めた少年に老詩人はこう その言葉たちが自分に一 ったものを紙に貼ってそれを見続けている ように言う。 少年にも「言葉にならない感情 タント写真などが貼ってあった。 で干からびたカエルや、 鑑」と命名されていたそれには、 クラップブックに出会う。 分の文章が面白くなくてとても悔しかった。 える自分の文章も心底、 本当に辛く、綺麗にまとめられただけに思 ていない感情を無理やり言葉にすることが 持ち悪さに吐きそうになった。 とは一ミリも合っていないと感じ、その気 綺麗にまとめられているだけで、 た私の感想は、 かされながらどうにか紙 感想を書く時間がもたれ 『あたらしい図鑑』の中で、少年は老詩人 人は言う。 「詩になる前のもやもや」をまとめたス 一然と湧き上がってくる言 そして、 何でもいいから自分が気にな 後から読み返すとすごく陳 自分の「あたらしい 番近いものだと老 猫 嫌だと思った。 の三分の ていた。 品のヒゲ、 あたらしい図 言葉になっ 葉がある。 小枝の上 を集める 老詩人は 私の内面 二を埋 インス 生に 自 8

> 言葉をかける。 に足を踏みいれたか」と。 少年も、 e V に言 葉 の森

> > 死

その日

の夜になった。

夜にはその

É

日

0

う。 Ŕ ど気持ち悪いとは感じなかったかもしれな な思い それは、そのスクラップブックにはまだ少 圧倒的に足りなかった。だからこそ、 域より大きかったものに向き合った時間が 私は原爆ドームを見た後に、 を見つけるには向き合い続ける時間がいる。 摯に向き合い始めた証なのだろう。 徨っているのだと思う。 ではないか。 に近い言葉を探して使っていたら、 感想を書いている時、その時点で一番自分 年に一番近い言葉がなくても、 プブックを見て、「面白かったぜ」と言った。 た感想が陳腐なものに感じられたのだと思 には「言葉にならない感情」があり、 彷徨う私の足跡であって、 老詩人は少年のつくりかけのスクラッ る言葉ではないからである。 むしろ「面白い」ものになっていたの 自分の文章の気持ち悪さも、 私は少年と同じように言葉の森 が溢れているからだろう。 なぜなら、 それは言葉の森を 私が覚える違和 自分と遠く離 自分の想像の 少年の正直 もし私が 言葉に真 それほ この世 それ 書 を彷 V

呼ぶ。 章は面白くなる。 その時点での自分の言葉を正直に書けば文 ければ、 同じように旅をしている人が見つけて認め に旅に出なければならない。 さを感じるのであれば、その人は言葉の森 すことはきつく、 く難しいことだ。 ものであれば良い。 葉が他人に評価されなくても、 だ、その言葉が見つかっていない時でも、 表している瞬間だった。 向き合う一人の「人」だと考えているの のだ。それは、 少年を一番に表す言葉で呼ぶことを認めた 年のことを初めて「五十嵐くん」と名前で れまで「少年」としか呼んでいなかった少 私はこれからも言葉の森の旅人であり続け てくれる。 たくなる。 へと向かっていく。 老詩人は少年を、 自分に一番近い言葉が分かる。 私はそう、 しかし少しでもそれに気持ち悪 老詩人が少年を共に言葉と 聞こえの良い言葉を並べ 誰だって言葉を必死に探 たとえ、 すごく当たり前ですご この本から学んだ。 病床で、 言葉と向き合い 「五十嵐」という 自分の正直な言 そうすれば、 自負できる 老詩人はそ ま 続

る。

物語が終わりに向かうにつれて老詩

人は

『あたらしい図鑑』 長薗安浩 ゴブリン書房

## 【一ツ橋文芸教育振興会賞

## 生と死を認識するもの

家の本棚にはたくさんの絵本があり、 らったものだった。 毎晩母親にお願いして読み聞かせをしても た。まだ五、六歳の小さな私の声。その頃 目で追っていると、懐かしい声が頭に響い たのか数えるほどになった絵本の背表紙を 何気なく家の本棚を眺め、いつの間に減っ 「これとこれと、あとこれも読んで……」 私は

おうとした記憶がほとんどない。それがな 『100万回生きたねこ』その文字を見た 流れていた目が止まった。読んでもら

> ぜなのか、今なら分かる。私はただ嫌だっ 韻を残して眠るということが、何よりも恐 優しい声で「ねこはもう、けっして生きか ろしかった。 えりませんでした」と言うことが。死の余 たのだ。ねこが死ぬということが。母が、

じていた無邪気な私は、周囲の大人の短い アメリカのように行き来できる場所だと信 たのはその頃だったと思う。天国や地獄は たり前の現実を、初めて正面から受け止め 生きているものはいつか死ぬ。そんな当

千葉県立東葛飾高等学校 二年

かに母の死だった。 ていた。私が何よりも恐れていたのは、 いて死んでいく母親の姿を想像しては泣い 私を焦りと恐怖に沈め、私はけなげにも老 なる。それは足のつかないプールのように 否定で「死」というものを認識するように

が、 こともない。昔はそれを意地悪だと感じた り返すねこ。飼い主はねこの死の度に泣く 印象が一変した。主人公は百万回生死を繰 手に取って再読すると、この本に対する 当のねこは一度も泣かず、死を恐れる

語 と be 受ける。これも「りっぱなのらねこ」に対 になり、周りのめすねこから様々な奉仕を とある。 べると、 がり」とある。辞書で「かわいがる」と調 からもらうこと」と言う。この言葉に沿え はなく、愛したいと感じる気持ちを、 ある母親は 小説『まほろ駅前多田便利軒』 ある言葉を思い出した。 行為に対しての皮肉のようで胸に刺さる。 分がすき」というねこの言葉は、 る。「しぬのなんかへいき」「だれよりも自 行の行為である。その後主人公はのらねこ て弱い存在に対し、上から下へ注ぐ一方通 に「100万人の人が、 使っているような印象を受けた。初めの文 ものだが、 して下から上へ送る、 副 まる副詞句で表せる。 他者からの愛の中で生きるねこを見て、 愛することは受動態の文、 人間たちはねこを連れまわし都合よく 詞句の中にいる。 動詞プラス動詞の過去分詞、 つまり「ねこ」という人間から見 「かわ 出てくる人間を見るとどうだろ 「愛情というのは与えるもので 11 いと思って大切に扱う」 三浦しをんさんの 方通行の行為であ そのねこをかわい そしてねこはい の中で、 英語だと主 これらの by から 相手

もの、 それでいて単純なような不可思議さをもつ うねる思考の先で、あの時の小さな私が泣 答えられない。当然だ。 私は重ねる。「死ぬって何?」小さな私は にねこは生き返らなかったのか、 無い小さな私は、 きないだろう。だが身近な死の体験すらも いるの?」「お母さんが死んじゃうから」。 いていた。私は問いかける。 百万回も生きたのか。それなのになぜ最後 私が望んでいた結末はこれだ。なぜねこは も静かに息絶え、二度と生き返らない。 った一匹の白いねこに向けて。やがてねこ 人間がねこに涙を流した数、 白いねこも。 するという受動態の主語になった瞬間 しか寄り添うようになる。 を飲み込んでいた。 「ねこはいつまでも幸せに暮らしました」 のだから。 最 後に主人公は白いねこと出会い、 しかし、 それが死だ。どんな天才でも理解で その時ねこは初めて泣くのだ。 生きているものはいつか死 とても複雑で、理解不能 しっかりと死というもの 大好きな母が居なくな 今の私が分からな ねこが初めて愛 百万回を、 「なぜ泣いて 考えた。 であ e V た ぬ 0

> 死は、 ねこは百万回も生き、 生を有意味化するのかもしれない。 しれない。 ターを通した時に初めて認識されるのかも ったのかなと思う。 私たちが他者 そして愛するという行為こそが の愛情というフィ 最後は生き返らなか だから

る。

私は誰 出し、 いい。 えた。 られる存在になりたい。 に死に近づいていて、でもそれでい 交差する幸福なこの文の主語 ではなく主語にいるときに生きる意味を見 れは二者間を相互に伸びる矢印であってほ 句を変えて無限に存在しているだろう。 は愛するという受動態の文が、 のアルバムがたくさん並べてある。 ぐ選挙権を持つ。 髪も皺も増えたし、 分の生をしっ 居間で寝ている母を見る。 幸せを感じることができるのなら、 かつて絵本があった場所には、 かの副詞句でありたい。 人もまたこのねこのように、 かりと見つめながら。 私たちは時々刻々と確実 小さかった私はもうす 世界を網 あ の内側 何かを与え 主語と副 0) のように 頃 副詞句 より白 家族 と思 そ

自

したものに確かな輪郭を与えていた。生と

るという具体的な恐怖が、

死という漠然と

『100万回生きたねこ』 佐野洋子 講談社

11

## 一ツ橋文芸教育振興会賞

## 読書が与えてくれたこと

かった。 ほとんど生き物を扱った本を読むことが多 読書感想文というと、小学校一年生から、

ムシ」は、父がある時 生態や特性が知りたくて読んだ。「カブト つ、毎日面白い戦いを繰り広げていたので がいつも同じカラスと庭でやり取りをしつ て飼育したくて調べた。「カラス」は、母 アネハヅル・ウミガメ・コウノトリなどだ。 (母がカラスに遊ばれていた) その本来の 「ザリガニ」は、ザリガニ釣りを成功させ 例えば、ザリガニ・カラス・カブトムシ・

> も見つからなかった。その時田舎育ちの母 「カブトムシを探しに行くぞ」 と言って、山深く車を走らせたが、一匹

> > 「ウミガメ」は父が、 「屋久島へ行こう\_

減り、たくさんのミツを吸えなくなったカ を見つけた。なんと、環境の変化で里山が なんだろう、と不思議に思い、本を探して た。そこで、どうして山奥じゃなくて里山 ブトムシは、少しのミツで生きていけるよ いたら『カブトムシ 山に帰る』という本 「カブトは里山や。人に近い所にいたよ」 と教えてくれた。行ってみると本当にい

> だ。全く違った。屋久島のウミガメは、 時だな、と楽観的に考えて注文し、読ん た。、えつ? 泣いてるの? あぁ産卵の

の車のライトで、海に帰る本能を狂わされ しいウミガメを観ようとやってくる観光客 思いインターネットで本を探したら…。

と言い出した時に「どんな島だろう」と

名は、『屋久島発 うみがめのなみだ』だっ 行を楽しみにしている僕の目に留まった書

兵庫県立加古川東高等学校 二年

うに小型化し始めたことを知って驚い

木舩幸太

危惧種になってしまったりしていることに

う子ガメを見つつ、 作戦に参加することにした。そして、 光ではなく、 りした。安心して浜に戻って産卵できなく た。一生懸命足をパタパタさせて海 て間もない子ガメたちを海へ返す活動をし ら出られなくなり命を落としかけた生まれ ち家族は、この本をきっかけに、 た。これからそこへ行こうとしている僕た から「助けて!」と訴えているなみだだっ なるなど、ウミガメを取り巻く悪しき環境 からの上陸や海へもどる時の妨げになった 捨てられたゴミは、 とができなくなって死ぬことが多い れ、生まれた子ガメが穴から地表に出るこ 海岸を歩き回る人々に 永田いなか浜での子ガメ救出 誤食を起こしたり、 砂 浜 を踏み固 ただの観 へ向か また 穴か め 5

こへ来ているのか、と疑問に思った。 った子ガメの姿も見た。 せっかく孵化したのに穴の中で死んでしま この浜に戻ってこいよ 大海原の危険から身を守り、 と声をかけた。と同時に人間 この次の年、 の変化によって種が変化したり、 カブトムシとウミガメが、 ″何をしに人はこ 三十年後に、 の無知から、 絶滅

> まる。 それを食べることで水銀が体に留まり病気 取り組みが始まった。 さとなる魚などが農薬によって汚染され、 作る木が伐採によってなくなったこと、 った豊岡市で、 という本だ。 んだのが ついて自分が住んでいる兵庫県が素晴らし になることがあげられる。そこで、 い取り組みをしていると知った。そこで読 Ó 野生個体が絶滅してしまったことに始 このコウノトリの最後の生息地とな 『コウノトリがおしえてくれた』 昭和四十六年日本のコウノト もう一度復活させるため 絶滅の原因は、 豊岡市 え

会い 最初から取り組まれた功労者だ。 があった。 トリを見送られていた松島興治郎さんの姿 す日が来た。 巣塔も立てた。そして、やっと大空にかえ とをやめ、 育てると共にコウノトリが安心して過ごせ 民はリンや鉛の入った洗剤や農薬を使うこ るように環境改善に取り組んだ。一部の市 は外国から同種のコウノトリを譲り受けて もした。 Ó に行って話を聞いた。 郷公園にいらっしゃると知り、 森林の木の代わりに繁殖のため えさとなる魚などを育てる活動 松島さんはコウノトリ 巣箱の横には、 笑顔でコウノ コ の繁殖に ウノト

> たせて、本当によかった\_ 「絶対に大空に返してやると いう約束が

には、 手は、 志の強さに感動し、 市全体を動かし、 と、 苦労話と共に熱く語 本当に温かかった。 コウノトリを優しく育てられたその 絶滅に立ち向かわれた意 握手していただい って下さっ た。

会を、 なと、 得るだけではなく、 時々の一冊の本が、 ても貴重な時間を与えてくれるものだっ 話をしたりと、 豊かになったり、 わせてくれた。そして、その場で考える機 をかけようとする人たちに、 かけに、 十 今改めて強く感じている。 僕に与えてくれた。 年間の読書を振り返っ 現地調査をしたり人と出会っ 本の世界から一 疑問を解決したり知識を 僕にとっては読書をき 生き物の絶滅に待った 読むことで心が たくさん出会 た時、 歩出 ع 7 0)

つ

### 体験書籍

大牟田 『コウノトリがおしえてくれた』 『カブトムシ 山 『屋久島発 うみがめのなみだ 一美・熊澤英俊 に帰る』山口 海洋工学研究所出版部 その生態と環境 進 池田 フレーベル 汐文社 館

### 一ツ橋文芸教育振興会賞

## おもい」をのせる便せん

最後に便せんに手紙を書いたのはいつだ

た すき♡』と一生懸命伝えたものである。そ のが楽しかった。使い慣れないカタカナを 羅列でうめつくされるようになってしまっ を間違えたりしながら『○○ちゃん、らい 左右反対に書いてしまったり、「だ」と「ら」 んな私の周りもLINEの無機質な文字の 小さいころは友達と毎日手紙を交換する

鎌倉で小さな文具店を営む傍ら、 先代を

> 引き継ぎ手紙の代書を請け負う鳩子。お悔 でくる。驚くことに、毎回鳩子は依頼内容 に合わせて使用する紙や筆記用具はもちろ やみや離婚報告など様々な依頼が舞い込ん ん、書体までも変えている。

るメッセージカードの文書だ。字が汚いか も綺麗な字が書けず子どものころからごま から依頼を受ける。カレンさんはどうして 依頼は、義母への還暦のプレゼントに添え かしながら生きてきたという。彼女からの ある日、鳩子は客室乗務員のカレンさん

中尾茉結奈

奈良県立畝傍高等学校 二年

も先代もそう考えていた。 見れば、相手がどういう人かわかる」鳩子 まで、「字はその人そのものなのだ。字を らと代筆の理由を話すカレンさん。その時 強もきちんと理解している。ただそれを整 彼は友達も多く、私より物知りで学校の勉 の時だった。見た目では全く分からない。 ィスレクシア」と診断されたのは彼が小二 っても整った字を書くのが難しい。弟が「デ た。私の弟はカレンさんと同じように頑張 ここまで読んで私は弟のことを思い出

フフッ、

面白

いもの見せてあげよっか?

の日になると小学生の弟には教科書やドリの日になると小学生の弟には教科書やドリルに名前を書くという宿題がよく出される。そういう時はたいてい少し書道を習っていた私が代筆を依頼される。そして私が代わりに書いてあげるといつも喜んでくれる。りに書いてあげるといつも喜んでくれる。つけば思わずカレンさんを応援している私がいた。カレンさんの立ち居振る舞いを見るうち鳩子は考えを改める。

さんに天国からの手紙を届けるという依頼 ご主人からの手紙を待ち続けているおばあ んだのだという。 の息子が父から母へと届いた古い手紙を読 が鳩子のもとにきた。 にも届けてあげたいと強く思った。 よくわかりました」。この言葉をい たんだってことが、 るんだ、って。でも、それって、 くないのは、きっと書く人の心がそうさせ 「私ずっと、誤解してたんです。 行った時こんな出来事があった。 またある時、 ずい分前に亡くなってい 私が昔、 カレンさんと出会って、 依頼主のおばあさん 祖 母の家に 偏見だっ 字が美し ・つか弟 遊び る

っている。
きた。開けてみるとそこには古い手紙が入きた。開けてみるとそこには古い手紙が入ってう言ってクッキーの缶を祖母が持ってママには内緒」

処分したそうである。そのさらに数年後、 した子である。そのはいと手紙やで。 これがママのものかなぁ」 時代の母が連想される。「おじいちゃん、 時代の母が連想される。「おじいちゃん、 時代の母が連想される。「おじいちゃん、 ないると祖母がこんな話を聞かせてくれた。 でいると祖母がこんな話を聞かせてくれた。 管祖母は夫が亡くなり独り身となり、ずっと住んでいた家を離れ、祖母の家の近くの と住んでいた家を離れ、祖母の家の近くの とせんでいたるを離れ、祖母の家の近くの とはんでいたると離母がこんな話を聞かせてくれた。 でいると祖母がこんな話を聞かせてくれた。 でいると祖母がこんな話を聞かせてくれた。 でいると祖母がこんな話を聞かせてくれた。

曽祖母はケアハウスへの入居を決心する。 処分したそうである。そのさらに数年後、 つかったそうだ。 曽祖母が亡くなった後、 小さなキッチンとトイレのある部屋にベッ ってしまった。 しで曽祖母の荷物は本当に少しの 入れられたそうである。 仏壇など必要最低限のものだけが運び そんな少ない 缶の中には私の母達 この クッキーの缶が見 荷物 一回の引 荷物に 0 中から つ越 な

> まわれていた。 つまり曽祖母にとっての孫からの手紙がし

なった。

「大事なものたくさん始末したのにこれは
「大事なものたくさん始末したかい気持ちに
と祖母がつぶやいた。

手紙は書いた人の「おもい」だけでなく、受け取った人の「おもい」も一緒にずっと残っていくものだと思った。私が誰かに宛てたへ届くものだと思った。私が誰かに宛てたべ届くものだと思った。私が誰かに宛てたが、

戻ったようだった。

### 験書籍

『ツバキ文具店』小川 糸 幻冬を

### 第39回

## 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## -様からの贈り

和歌山県 智辯学園和歌山高等学校 二年

### 清水愛萌

『唇 た戻っへに、音重音は寿引 たどりになることを歓喜と呼ぼう」――「すべての人が兄弟となり、一つに

『棒を振る人生 指揮者は時間を彫刻する』は、世界的に活躍する指揮者、佐渡裕さんが数々のエピソードとともに、音楽観さんが数々のエピソードとともに、音楽観さんが数々のエピソードとともに、音楽観の時から所属しているオーケストラ(SKの時から所属しているオーケストラ(SKの)の芸術監督でもある佐渡さんが、音楽のかを改めて知りたかったので、この本るのかを改めて知りたかったので、この本

二〇一一年の東日本大震災のときのエピソードが一番心に残った。震災が起こったとき、佐渡さんは無力感と戸惑いに襲われたという。大災害を前にして、何かをやらなければいけないのに何をすればいいのかわからない。水一杯、毛布一枚を届ける尊さを知らされながら、音楽家は何もできない。でも、復興祈念のためにその年の夏にい。でも、復興祈念のためにその年の夏にい。でも、復興祈念のためにその年の夏にい。でも、復興祈念のためにその年の夏にい。でも、復興祈念のためにそのとき、音楽なんて聴いたことがなかったとい

られた体験の一つだという。 佐渡さんの音楽人生の中で最も心を揺さぶはやっと涙が出た」と話してくれたことが、

後私もSKOに入団し、東北への復興祈念の必要性と偉大さを改めて実感した。その来がエネルギーを与えたと知り、私は音楽ない状況が続いていた被災者の方々に、音ない状況が続いていた被災者の方々に、音楽がエネルギーを与えたと知り、私は音楽に、音楽がエネルギーを与えたと知り、私は音楽がなるという思いを抱え、

的

な支援を必要としている。

社会的にはラ

でして、自分の目指す将来の姿が変わってくれることを再認識させられる。 でくれることを再認識させられる。 でくれることを再認識させられる。 でくれることを再認識させられる。 でくれることを再認識させられるが、街は少し 演奏に参加させて頂いているが、街は少し

とだけ考えていた。 思っている。未だ治療法がなくて苦しんで として社会に貢献し、 ときに震災や災害が起こったら医療従事者 い。これまでの私は、 また、このことは医学に限ったことではな かされた。「精神的な支援」の大切さだ。 れず、患者さんの心のケアの必要性に気づ と思えてきた。目に見えることだけに捉わ してから、それだけでは不十分ではないか な力」だ。音楽の持つ不思議な力を再認識 せることしか考えていなかった。「物質的 提供し、命を救ったり病気や怪我を回復さ からだ。でも、 いる患者さんの命を一人でも多く救いたい ていった。私は将来、 た方は、 物質的な支援と同じくらい精神 以前の私は、進んだ医療を でも今は違う。 人々の 自分が大人になった 医学に従事したいと 力になりたい 被災さ

> を通して、 楽の喜びを味わうことができる。 支援ができるようになりたいと思うように る特別な時間を創り、そこにいる全員で音 深く関わることができると佐渡さんは教え や慰めも不可欠だ。そして、 るが、大切なものをなくした人々には ことを忘れず、 てくれ、実際に自分も体感している。 イフラインの復活や物質の調達が注目され 演奏する側と聴く側が一体とな 物質的、 精神的の二刀流 音楽はそこに 私はこの 癒し

なった。

いう。 う喜びを体感し、 響曲第九番を演奏するコンサートだ。 てだ。「一万人の第九」は、 をつけることを何よりも大切にしていると んは、 は音楽に縁のない人が集まり、 もう一つあった。「一万人の第九」につい いる「音楽を楽しみたい」という欲求に火 本番で心を合わせ音楽を生み出す。佐渡さ 万人の合唱団が毎年ベートーヴェンの交 音楽をする喜びを象徴するエピソードが 声という実体感を伴うものにより歌 誰もが本能として持って アマチュアの 度きりの 普段

すべての人は兄弟になる」とある。この不第九の歌詞に「神の不思議な力によって、

思議な力は、誰もが一体となって生きる喜いかと思う。私は、子供からお年寄りまでいかと思う。私は、子供からお年寄りまでいかと思う。私は、子供からお年寄りまで、人公となる「一万人の第九」のあり方に、一方人の主きの本質を見出せる気がした。音楽によって多くの人と喜びを共有し、家族のようなもに繋がることが、生きている証のようなものになるのではないかと思う。

間らしい人間になることだと思う。 薄っぺらい人間ではなく、 いる私の使命は、 知り得、また今、 ではないかと。この本を通してそのことを 間に教えようとして神様は音楽を作ったの ることが人間の本質であり、 と言う。 きる喜びを味わい、 も異なるが、 佐渡さんは、 人によって価値観は違 音楽は神様からの贈り物だ 緒に生き、それを喜びとす 実際に体感できる環境に 形のあるものに捉われる 人々と共有できる、 音楽を通じて生 そのことを人 生き方

### 吟詩書籍

佐渡 裕 PHP研究所「棒を振る人生 指揮者は時間を彫刻する」

### 第 39

### 【一ツ橋文芸教育振興会賞 のかたも

予め決まっていて、 バレエは窮屈だ。 頭の先から出ている糸が天井に吊ら 一番美しく見える型は 私たちはそれからはみ そう

する。 界では容赦なく、前列のセンターから実力 順に位置が振り分けられる。「私もバレエ 中心で踊る機会をいただいた。ダンスの世 を十一年間続けたおかげもあって、何度も 先生に指導される度、幼い私は自分が操り れているように背筋を伸ばしなさい。 出さないように自分の身体をコントロール 人形になったような気持ちを抱いた。 高校で入った創作ダンス部では、 バレエ

> びりびりに破いて吹き飛ばしてしまいたか 私を構成するありとあらゆる枠組みを全部 という虚像を壊したくて堪らなくなる。過 葉を聞く度に申し訳なさと息苦しさを抱く。 を習っておけばよかった」という周りの言 も劣等感も優越感も身体も名前も性別も、 去の経験年数も日々の葛藤も、嫉妬も羨望 そんな時、いつも私は周囲が作った「私」

郎の 彼らはいつも「内側」にいた。大江健三 『芽むしり仔撃ち』の舞台は太平洋戦

抗い続けた「僕」

のように。

った。常に「内側」にはめこまれることに

愛媛県立松山東高等学校

唯一の交通路であったトロッコの軌道の先 村人たちに見捨てられ、 が遮断されているのを見た「僕」は茫然と た。疎開先では、疫病の恐怖にさらされた の目に晒されたりと、 で連れ戻されたり、 の道中、 た少年たちは山奥の村に集団疎開する。 争の末期。罪を犯し感化院に収容されてい 怒りで体を熱くする。 何度も脱走を試みるが瀕死の状態 周りの村人たちの好奇 彼らに自由はなかっ 置き去りにされる。

玉 閉じ込められた村で、彼らは を築く。狩猟を覚え、祭りを催す。 「自由 の王

に はあるが、 ゃ たちの村さ。 自由」だったのだ。 置かれないこの共同 ないし。 主人公の言葉は 少年たちにとって大人の監視下 俺は誰 からも 生活 精 棄てられ は紛れも 杯 0 虚勢で た訳じ なく

自由を祈っていた。 までもそれに拘泥していた。 た人々のことなどの外部を持ち込み、 対して、 い障壁があった。ずっと内側である彼らに 兵士の間には乗り越えることのできない たを摑まえない」と主人公は言う。 なら何をしてもいい、 は今だって自由じゃないか。 いた。 この村の中に匿われてい 兵士は戦争の勝敗や村の外に逃げ 彼はいつも戦争の終わり そんな兵士に 中 略) た一 この村の中で 誰一人あん 人 と自らの 0 「あんた 彼らと 脱走兵 11 高 0

う一人 ではなく、 にもう一度問う。 先生が聞いた。 かりと浮かぶ何もない空間に全てのみこ たちはに や生い立ちを説明したところで、 なたは誰ですか? 0 人間を表すことはできない わかに混乱し、 あなたという人間が知りたいの 言語は現実に追いつけな 自分の名前を名乗った少女 あなたは誰です 現代文の授 恐れを抱く。 、のだ。 私とい 文業中に 名前 ぽ

> もかかわらず、 った。 ものはどこに存在しているのか。 体自由とは何なのだろう。 素を全て取り上げられたら不安になる。 子になったような気がして、突然心細くな 断片的にしか切り取れないとして、 まれていくような思い あれほど自由になりたいと願ったに いざ自分を形作 がした。 言葉は っている要 自 分が迷 私その 私を

とによって、相対的に自由になり得るチャ事を認識し判断したいという努力をするこ ある。 に意識し、 ンスに恵まれてる、というものだ。 めている者は、何とかして、ヨリ自由に物 る」こと』に、 丸 山眞男さんの 自分が 自分の「 「捉われている」ことを痛切 次のように書かれた文章が 『「である」ことと「す 偏向」 性をいつも見つ

ら

間にはない、 立しているため無条件的な絶対の自由 私たちは自由を獲得することができる。 てみると、 また、「自 のだ。 人間は完全に自由になることなどでき 自由は 何かしらの 曲」という言葉を辞書で調 とあ った。 定の前提条件の上 制限があ 胸にストンと落ち って初め は人 一で成 7 ベ

> い指、 る。 ているのだ」。 でも僕をひねりつぶし締めつけるため まうことは決してできない。 ず閉じこめられているだろう。 していた。しかし外側でも僕は いたどんづまりから、 村 から追放される。 その脅しに最後まで抵抗した主人公は 荒あらし 11 腕は根気づ 僕は閉じこめら 外 追放され よく待ちうけ 内側でも外側 脱出 あい かわら してし ようと ħ 0) 硬

筋を伸 する。 ない。 に 背中から天高くどこまでも伸びていくよう 三郎さんの言葉だ。 いく。それが私たちの生のかたちなの 由な生き方を目指してもがきながら生きて も誰かを枠にはめながら、 本意な枠に押し込められながら、 ばそれは型無し」。 芸術は自由になるためにあるの 私たちは生きている限り外側に憧 「内側」にとどまり続けるのだろう。 ばした。 今まで習得した型を守りながら、 型があるから型破 本の真っ直ぐな糸が私の 歌舞伎の十八代中 鏡の の前でポー n) o その中でより自 型がなけ ーズを確 また自分 かもしれ れ なが 村 不 n

### 体験書籍

"芽むしり仔撃ち" 大江健三 郎

を幽閉した事実を隠蔽しようと

嘘を強要す

がて帰還した村人たちは、主人公たち

### 中央選考委員選評

### 変身と自由

『変身』を読むという経験は、一度死んで甦るという通過儀礼に等しい。この作品を寓意として読むのは誤りで、グレーゴルの身に起きたことを追わっていないことにホッとする、それが貴重なのだ。しかし、ひょっとして、そんなことが自分のだ。しかし、ひょっとして、そんなことが自分のだ。しかし、ひょっとして、そんなことが自分のだ。しかし、ひょっとして、やれば貴重なのかまにときは翌朝日覚めて、何事もなかったことを残念がっていると、池田渉でしかなかったことを残念がっているのかもしれない。

変身願望は『「遠野物語」の世界を旅して』(井ずマや河童を、あるいは私達が全く知らない、しサマや河童を、あるいは私達が全く知らない、しかしなつかしい不思議な世界の住人を連れて来てくれそうだ。

恐らくそれは、谷栞里さんが書くように、「私人と言ってもいい」であり続けようとする。「自分の想像の域より大きかったものに向き合った」時、それを何とか表現しようともがき続けてた」時、それを何とか表現しようともがき続けてた」時、それを何とか表現しようともがき続けてた」時、それを何とか表現しようともがき続けてかけて、人々は「言葉の森」(津田歌らくそれは、谷栞里さんが書くように、「私人と言ってもいい」であり、「言葉の森」(津田歌らくそれは、谷栞里さんが書くように、「私人と言ってもいい」であります。

「本の世界から一歩出ることだ」と書く木舩幸太『読書が与えてくれたこと』は何かというと、な文の紡ぎ手になるという決意へと繋がる。在になりたい。世界を網のように」織りなす幸福は誰かの副詞句でありたい。何かを与えられる存

「フフッ、面白いもの見せてあげよっか?」ママ母さんのチャーミングなこと!したり、カブトムシのありかを的確に指摘するお魅惑的な文章がそれを証している。カラスと対話君の認識は鋭い。生き物についての、彼の精細で

正しい文章というものがある。それは読む人の正しい文章というものがある。それは読む人の正しい文章のことだ。『音楽は神様からの贈り物』(清すべてを納得させ、思考と行動に赴かせる力を持すべてを納得させ、思考と行動に赴かせる力を持すべてを納得させ、思考と行動に赴かせる力を持

いだろう。という言葉を入れ替えてみるのも面白と〝自由〟という言葉を入れ替えてみるのも面白共通するテーマを扱っている。例えば、〝変身〟に『生のかたち』(沖田英里)は、『蚊と変身』に

### <sup>©</sup> 辻原 登

バレエのポーズについて、冒頭の「頭の先から出ている糸が天井に吊られているように背筋を伸ばした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くとこまでも伸びていくように」(下から上へ)と反転する生のかたち(変身と自由)が鮮やかだ。選外となった作品についても触れておきたい。『ミルク・クラウン』(北田なつき)と『愛のある世界』(古川咲希)の才気溢るる書きぶりに魅せられた。それぞれ、「牛乳が嫌いだ」「私は植物を育てることができない」と始まる。そして、あれこれの末、結局それを克服できない、というよりそういう自分を受け入れようと決意する。一見、カイディブ・ラヴを謳うかのようだが、実は一巡りしてユーモアに転じているのである。ユーモアりしてユーモアに転じているのである。ユーモアりしてユーモアに転じているのである。

『私と姉のハーモニー』(瀬戸みらい)の一番の『私と姉のハーモニー』(瀬戸みらい)の一番の、家を出た兄が七年後、女装して帰って来る物の、家を出た兄が七年後、女装して帰って来る物の、家を出た兄が七年後、女装して帰って来る物語と、〈私〉の姉の一年振りの帰郷と和解が描かれて、読書の時間と現実の時間が縒り合わされて、読書の時間と、本に関係ない〈私〉の現良さは、読書の時間と、本に関係ない〈私〉の現しているがが出る。

### 言葉と現実

『蚊と変身』では、現実の「蚊」と作中人物の比でないとことではなく、彼をとりまく環境が虫用のものになったことではなく、彼をとりまく環境が虫用のものになったことをさすのではないだろうか」という認識が示されている。「姿」のように固定されたものではなく、変わり続ける周囲との関係性こたものではなく、変わり続ける周囲との関係性こたものではなく、変わり続ける周囲との関係性こたものではなく、私たちは自分一人ではコントロールできないところにその根拠を預けていることになる。「引越や進学などによる環境の変化も、大きな意味でとらえれば変身なのだから変身は万人に起こることだと言える」という展開も意外に見えながら説得力がある。その不安を心の奥で万人が感じ取っているからこそ、『変身』が名作とされ感じ取っているからこそ、『変身』が名作とされるのだろう。

来訪から110年後の遠野の姿が描かれている。 来訪から110年後の遠野の姿が描かれている。 タイトルは「少年も、ついに言葉の森に足をないるのだが、この読書体験記の作者のように「言葉にならない感情」を大切にしたいと願う者だけが「言葉の森」を彷徨うことになるのだ。その切実さに胸を打たれる。『「遠野物語」の世界を旅して』には、『遠野物語』の作者である柳田国男のて』には、『遠野物語』の作者である柳田国男のて』には、『遠野物語』の作者である柳田国男のまさいる。

る歴史に繋がってゆく感覚に惹かれた。調査に結びつけているところもいい。土地に流れそこで得たものを自らの地元にある広瀬川伝説のはなく取材記事なのだ」という一文が印象的だ。フィールドワークの実感として記された「昔話でフィールドワークの実感として記された「昔話で

の物質性について考えさせられた。インターネッ 的だ。『「おもい」をのせる便せん』を読んで手紙 ナミズム。また生き生きとした肉声の会話も魅力 読書体験の、どこまでも転がってゆくようなダイ び、関心が関心を呼び、体験が体験を呼ぶという ネハヅル・ウミガメ・コウノトリ」、本が本を呼 れている。「ザリガニ・カラス・カブトムシ・ア 野である生き物についての本が何冊も取り上げら 記憶の中の「母」を鍵として提示された「生と死 臨場感が素晴らしい。その気持ちはよくわかる。 うことが、何よりも恐ろしかった」という文章の した」と言うことが。死の余韻を残して眠るとい 声で「ねこはもう、けっして生きかえりませんで たのだ。ねこが死ぬということが。母が、優しい て書いているところが面白い。「私はただ嫌だっ た絵本ではなく、 した時に初めて認識される」という考えに頷いた。 は、私たちが他者への愛情というフィルターを通 読書が与えてくれたこと』には、作者の関心分 『生と死を認識するもの』は、幼い頃に好きだっ 読まれたくなかった絵本につい

### \* 穂村弘

が深められてゆく様子がスリリングだ。 想させる。言語体験と身体感覚を両輪として認識 側」にとどまり続ける』とは、直接的には体験書 バレエのような身体感覚と文学的な概念を擦り合 変えた読書と演奏の力を思う。『生のかたち』では、 がってゆく。「物質的、精神的の二刀流の支援が な力」とは別の「精神的な支援」への気づきに繋 本の著者と共にした演奏による追体験が「物質的 震災時の無力感とそこからの回復を知る。 知らされながら、音楽家は何もできない」という 書を通して、「水一杯、毛布一枚を届ける尊さを 値を言葉で捉え直そうとする意識が見られる。読 だ。『音楽は神様からの贈り物』には、音楽の価 さまざまな要素が直観的に把握されているよう 逆転した感覚の中で、時間、 の私より幼い年の母の手紙を読んでいる」という 者の中に「不思議な感覚」が生まれたという。「今 の母親の「いかにも小学生ぽい字」を見た時、 書くのか知らないということもある。子ども時代 トが普及した現在では、親しい人がどんな文字を ながら、身体から脱出できない我々の在り方を連 籍『芽むしり仔撃ち』についてのコメントであり わせた「自由」についての考察が試みられている。 できるようになりたい」。作者自身の将来の夢を 『私たちは生きている限り外側に憧れながら「内 血縁、 成長、 さらに 死など

## 「今」の読書と体験

だけでなく、受け取った人の「おもい」も手紙と 自由について考察を重ねている。型があるからこ けているバレエを通して、内側と外側、不自由と 親の手紙のエピソードが印象深い。 らためてそのことに気づかされた。幼いころの母 手紙の本質ではない。また、書いた人の「おもい」 に気づく。字が汚いことも文章がつたないことも、 身の身体感覚から得たひとつの真実だと思う。 そ、そこから生まれる自由があるというのは、自 いっしょに残っていく、という文章には、私もあ 『ツバキ文具店』を読み、手紙というものの本質 『「おもい」をのせる便せん』の中尾茉結奈さんは、 「生のかたち』を書いた沖田英里さんは、長年続

なく受動態であるという気づきは、 で考察している。「愛すること」は、能動態では 生きることについて、みずみずしくすなおな文章 『生と死を認識するもの』のなかで、谷栞里さん 一冊の絵本を通し、愛することと死ぬこと、 非常に興味深

きなのだろう書き手自身が、文章のなかに生き生 私にはとても新鮮だった。行動的な父親と、田舎 きと息づいている。カブトムシ、ウミガメ、コウ の生物にくわしい母親、そして生きもの全体が好 木舩幸太さんの『読書が与えてくれたこと』が、

> ミックに融合している。 クだ。書物と世界が、木舩さんの文章でダイナ ノトリと、三冊の本を取り上げているのもユニー

声のように堂々と響いて、感動した。 ときちんと咀嚼したからだろう、清水さん自身の 章は、読んだ本からの抜粋ではあるけれど、きっ びとすることが人間の本質であり――」という文 についても考えなおす。「一緒に生き、それを喜 り添い、人を救う。そして清水さんは自身の将来 一冊の本を通して音楽の力を知る。音楽は人に寄 『音楽は神様からの贈り物』の清水愛萌さんは、

に見つけている。津田さんの文章は、とても誠実 を無視せず捉え、その違和感の正体を小説のなか に伝えている。経験が言葉を超えたときの違和感 は端整で読みやすく、津田さんの思いをまっすぐ で、そこが大きな魅力だ。 津田朔さんの『「言葉の森」を彷徨う』の文章

んにも、「人々の願いや夢、不平や不満」が育ま かにそうだとあらためて思わせる。この先井崎さ は昔話ではなく取材記事、というところも、 の言葉できちんと捉えていると思う。『遠野物語 験記のなかで、遠野という場所の特殊性を、 ている井崎さんの行動力はすごい。そしてこの体 『遠野物語』に魅了され、一度ならず遠野を訪れ 自身 たし

に書いていってほしいと思った。 れた、過去の、あるいは現代の取材記事を、 独自

によって変わっていく。だからここに、今の-きっと池田さんのこの結論は、年齢を重ねること 肉声となって息づいている。だから説得力がある。 まりこの文章のなかで池田さんが出した結論は、 現実のなかで考えること、そして自身の言葉で書 れる。ここでの思考と気づきは、小説を読むこと、 しておいてよかったと思う。 何にもまだ変身していない池田さん自身を書き記 くこと、という一連のなかで生まれたものだ。つ 池田渉さんの『蚊と変身』は力強い文章で綴ら

と遠く、それぞれが希望する広い世界へ連れて この「今」がいつか、高校生のみなさんを、ずっ いってくれることを私は望む。 をし、今しかできない体験と思考を重ねている。 だれしもが、高校生である今しかできない読書

## 読書すること、成長すること

初等中等教育局主任視学官 巨人 毛 告上心文語科学省

取り、さらに地元の広瀬川周辺の伝説を聞き取っ じさせる。井崎さんは 崎さんのはやる気持ちを抑えようとする思いを感 を与える書き出しで始まっている。その書き出し を大切にしたいという意志を感じる。 らこそ、むしろ地域で生きる人々の生活や息遣い ている。グローバル化が強調される時代であるか 所等を訪問してそれぞれの所で物語の場面を感じ が読む者を『遠野物語』の世界に誘うとともに井 『「遠野物語」の世界を旅して』は、静かな印象 『遠野物語』に登場する名

ということは十分あり得る。その思索の道筋を自 ないだろうが、周りの環境が大きく変わっていた になっていたという経験をすることはほぼあり得 分にまとわりつく蚊を用いてうまく表現してい も少なくない。現実の世界で、朝、目覚めたら虫 ていく時、突然、他者から突き付けられる不条理 むこともできるな、と考えさせられた。人が生き 『蚊と変身』は、『変身』を池田さんのように読

供にとって、物語の最後はハッピーエンドが望ま との意味を問い質す読書体験記である。多くの子 い。しかし、愛することを知ったからこそ生を自 しいが、『100万回生きたねこ』はそうではな 『生と死を認識するもの』 は、 読む者に愛するこ

> 認識させられる言葉である。 る。それぞれの人を固有名で呼ぶことの意味を再 のも納得がいく。この読書体験記の終盤に、老詩 めた証」と捉えれば、高校生や大学生の頃という 幾度もあった。それを「言葉に真摯に向き合い始 自分の思いや感情とはズレていると感じることが 学生の頃、自分の思いや感情を言葉にした瞬間、 気持ちをうまくまとめている。私も、高校生や大 るように感じる表現に深く考えさせられた。 る「愛するという受動態の文」という矛盾してい 覚し、死に至ったと考えれば納得がいく。鍵とな 一番表す言葉で呼ぶことを認めた」と述べてい 人が少年を「五十嵐くん」と呼ぶことを「少年を 『「言葉の森」を彷徨う』は、多くの人が感じる

せ成長させることにつながっている。 となり、その行動が木舩さんを多くの人と出会わ 話をしたり」と述べている。読書が具体的な行動 書をきっかけに、現地調査をしたり人と出会って いるが面白い読書体験記である。木舩さんは「読 『読書が与えてくれたこと』は、少し変わっては

たちが私宛に書いてくれた手紙を捨てられずにい を考えさせるものである。私自身も幼かった息子 と、手紙を受け取ること、手紙そのもののおもみ 『「おもい」をのせる便せん』は、手紙を書くこ

> で簡単にメッセージを送ることができる時代だか ていた服の色まで思い出す。スマートフォンなど るたびに当時の息子たちの表情も話し方もよく着 らこそ大切にすべきことなのだろう。 る。字も書かれたことも稚拙だが、その手紙を見

びを与えたりするものなのだろう。取り上げられ 楽は人の心を震わせ、癒したり、励ましたり、 肉の味を知らず」という言葉があるが、実際、音 ことの一つではないだろうか? 論語にも「三月 歌ったりすることは、人類が最も早く見いだした を出してそれを楽しんだり、音に合わせて歌を さをストレートに表現している。何かを使って音 ている佐渡裕さんのエピソードもよい。 『音楽は神様からの贈り物』 」は、音楽の素晴らし

バレエを象徴的に用いてうまく表現している。 の言葉が胸にストンと落ちたという。そのことを 条件的な絶対の自由は人間にはない」という辞 思考を巡らせるのではないか?
沖田さんは、「無 校生のころ多くの人が自由を求め、自由について ち』をもとに自由について考えたものである。高 『生のかたち』は、大江健三郎の『芽むしり仔撃

## 探究学習の一手法として

こうした状況の中、今回で39回目となった本コン りません。ところが文科省が調査した平成29年に 書体験を欠かすことができないのは言うまでもあ 話的で深い学び」と「探究」です。この二つに読 より敬意を表したいと存じます。 応募者並びにご指導くださっている先生方に衷心 クールに全国から9万編を超える応募があること まないという極めて残念な結果になっています。 おける高校生の不読(1箇月に1冊も本を読まな い)率は50・4%と高校生の二人に一人が本を読 次期学習指導要領のキーワードは「主体的・対 誠に意義深いものであると思います。全国の

とで、作品論に偏り過ぎず、読書体験記となった ちづくられる」とし、この人格をスライムに喩え します。冒頭にこの 身」は周囲の変化によるものでいつでも起こって ています。ここの喩えは秀逸です。そうして「変 に「自分という存在は他者との関わりの中でかた を虫たらしめていたのは周囲の人間」とし、さら の違和感から思考をはじめています。そして「彼 身』は自分が叩いて殺した蚊とグレーゴルの死と いることだとして、この小説の持つ普遍性を指摘 が良かったと思います。ですから最後の一行も 文部科学大臣賞となった池田渉さんの『蚊と変 蚊 」のエピソードが入るこ

○です。

栞里さんの『生と死を認識するもの』は子どもの 葉に対する感性の高さが伝わってくる作品です。 かる」と光明を見出し「これからも言葉の森の旅 葉と向き合い続ければ、自分に一番近い言葉が分 す。それが『あたらしい図鑑』 に出会うことで 「言 本質的な欠陥を自ら感じた違和感で表現していま やり言葉にすることが本当に辛く」と言葉が持つ 彷徨う』です。「言葉になっていない感情を無理 同賞のもう一つが津田朔さんの『「言葉の森」を にもなり得ています。最後の一文も素晴らしい。 地理、風俗文化が織り込まれ立派な「探究」学習 とはそうそう書けるものではありません。自然、 致で「私の知る物語に、色や匂い、温度が加わる. ですが、見聞した内容が見えてくるかのような筆 せる秀作です。遠野へは2度目の訪問ということ 人であり続ける」と結んでいます。津田さんの言 『「遠野物語」の世界を旅して』は文章力を感じさ 以下の5編が一ツ橋文芸教育振興会賞です。谷 全国高等学校長協会賞となった井崎英里さんの

全国高等学校長協会 小林正

りに理解した箇所も秀逸です。 等全体の構成も巧みに書かれ、 と「外側」をキーワードに冒頭と終結部との対比 ソードが読み手のこころをあたたかくさせます。 わり感があります。弟の診断内容、 いていることに象徴されているように独特のふう る便せん』は表題からしてひらがなを意識して用 ています。中尾茉結奈さんの『おもい」をのせ なるような実体験がリアルに描かれた作品となっ に基づいています。こちらも探究学習の一手法と いるのはこのような作品も評価しようという意図 このコンクールの名称が「読書体験記」となって げ、それが全て生物に関係する本となっています。 れたこと』は受賞作の中では異例の3冊を取り上 います。沖田英里さんの『生のかたち』は に気付く過程が文字どおりの読書体験記となって 質的な力」だけでなく「精神的な支援」の大切さ す。医学を志す清水さんがこの本を読むことで「物 音楽の持つ本質的な力をストレートに書いていま 清水愛萌さんの『音楽は神様からの贈り物』は 感じられます。木舩幸太さんの『読書が与えてく 「自由」を自分な 祖母とのエピ

しみです。 第40回目という節目を迎える次年度が今から楽

思索を深めています。「母」への眼差しにも愛が いがる」から「愛(情)」を交え、「生と死. 回生きたねこ』から「死」を思考しながら「かわ ころから何度も読み聞かせられてきた『100万

への

# 第39回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者(敬称略)

### 【優良賞】 39編

合う	孤独と向き合う	菅田悠乃	二年	立 益田高等学校	似県 県立	島根県
<i>x</i> a	生きる、死ぬ	多田百世	二年	立 米子東高等学校	<b>以</b> 県 県立	鳥取県
<i>ξ</i> ,	橋を架けたい	片岡琢雄	二年	立 天王寺高等学校	政府 府立	大阪府
クラウン」という生き方	「ホスピタルクラウン_	切島温子	三年	立 桂高等学校	府 府立	京都府
れば、道は拓ける。	一人に慣れれ	森 初菜	二年	立 水口東高等学校	見県 県立	滋賀県
くれた本	私を変えてくれた本	泉山愛	一年	立 セントヨゼフ女子学園高等学校	星県 私立	三重県
8方	私という生き方	遠藤あおい	一年	立 豊田西高等学校	4県 県立	愛知県
から	救いとこれから	柿 和佳奈	三年	立 浜松市立高等学校	鸣県 市立	静岡県
「自分」	カッコ悪い	岩井ゆらら	一年	立 大垣北高等学校	平県 県立	岐阜県
いて考える	尊厳死について考える	船越彩那	二年	立 松本第一高等学校	早 私立	長野県
<b>吹</b> く	自分らしく咲く	出射悠羽	一年	立 吉田高等学校	米県 県立	山梨県
	存在意義	澤田晴	二年	立 大野高等学校	开県 県立	福井県
	小説の自由	袖元継	三年	立 金沢泉丘高等学校	川県 県立	石川県
の教え	ガネーシャの	山夛真由	二年	立 富山中部高等学校	県 県立	富山県
アの価値	ボランティア	山田朱凜	一年	立 新潟高等学校	<b></b> 県立	新潟県
<b>岕</b>	愛のある世界	古川咲希	二年	立 聖ヨゼフ学園高等学校	神奈川県 私立	神奈
	言葉の温度	植木野々花	三年	立 星野高等学校	県 私立	埼玉県
	一声の強さ	金子 暖	一年	立 高崎女子高等学校	<sup>网</sup> 県 県立	群馬県
くても幸せ	完璧じゃなくても幸せ	稲田彩那	一年	立 真岡女子高等学校	小県 県立	栃木県
越える	震災の川を越える	丸山 渚	二年	立 会津高等学校	県 県立	福島県
』から学ぶ 	『日日是好日』	佐原芽依	一年	立 米沢興譲館高等学校	心県 県立	山形県
	私の道	安倍実織	一年	立 秋田北高等学校	山県 県立	秋田県
クラウン	ミルク・クラ	北田なつき	二年	立 盛岡第四高等学校	丁県 県立	岩手県
方』とは	『覚悟の磨き方』	久保光彰	三年	立 八戸高等学校	林県 県立	青森県
、」、願いを開く	「おす登あく」、	山内爾子	二年	立 札幌南高等学校	ば道 道立	北海道

ıÞ	山梨県	ıÞ	ı	ıÞ	福井県	ıÞ	ı	E	石川県	ıÞ	ıÞ	ıÞ	富山県	<b>T</b> t	ı	ıÞ	新潟県	<b>T</b> )	#1	Ŧ,	神奈川県	T.)	1)	T)	東京都	ı 🗁	==	ıı.	千葉県
県立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	国立	県立	県立	県立	県立	県立	私立	県立	県立	県立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	県立	国立	国立	立
甲府東高等学校	上野原高等学校	若狭高等学校	藤島高等学校	藤島高等学校	羽水高等学校	金沢二水高等学校	金沢西高等学校	金沢大学附属高等学校	金沢桜丘高等学校	富山商業高等学校	富山商業高等学校	砺波高等学校	高岡南高等学校	新潟清心女子高等学校	新潟高等学校	高田北城高等学校	高田北城高等学校	聖ヨゼフ学園高等学校	聖セシリア女子高等学校	湘南工科大学附属高等学校	湘南工科大学附属高等学校	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	白百合学園高等学校	女子学院高等学校	東葛飾高等学校	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	<b> </b>
一年	二年	三年	二年	年	三年	一年	二年	二年	二年	二年	年	二年	年	一年	一年	一年	一年	二年	二年	年	一年	三年	三年	一年	一年	二年	二年	一年	_ 年
渡邉優美那	片岡 凜	風呂 樹	廣田万由子	渋谷 泉	青山櫻子	小西麻友	山崎うた	小坂桃香	坂井 藍	坂下優成	田部央	市村友里	大角風歌	小林紗也	中山慎太郎	萩原ななみ	小林楓河	相川綾音	杉浦萌夏	稲田美月	相澤麟太郎	芹川史枝奈	小坂祐生	藤川芽生	前田実咲	小林はる	山崎陽大	奥田桂世	<b>石灣</b>   菜
叶うなら私は梢の漫画を読みたい	心の拠り所があるのは大切なこと	コミュニケーションとディベート	ゲーム中毒奮闘記	タイムマシンなんていらない	王子さまとバラ	寄り添うこと	手紙屋	「今」を伝える道しるべ	変わる決心	戦争から学んだこと	走るということ	誰もが輝くために	一分間の沈黙	灯台もと暗し	境界線で揺れる私たち	ちいちゃんが教えてくれたこと	「生きていくこと」・「死んでいくこと」の意味	理解することとされること	戦争・原爆の歴史を通して見えてくるもの	最悪な読者	不器用だからこそ、諦めない。	「過去の歴史」から「生きた未来」へ	知性という力	私にも好きなものがある	未来の決定権は私にある	視野を広げて	聴覚障害の克服	自分の殻を破る一歩	トライアル・アンド・エラー

府立	私立	府立	京都府 府立	県立	県立	県立	滋賀県 県立	県立	国立	国立	三重県 私立	県立	県立	私立	愛知県 県立	私立	県立	私立	静岡県 県立	県立	県立	県立	岐阜県 県立	私立	私立	私立	長野県 市立	県立	10000000000000000000000000000000000000
一洛西高等学校	京都女子高等学校	一 桂高等学校	門沂高等学校	水口東高等学校	一 米原高等学校	- 高島高等学校	安曇川高等学校	名張青峰高等学校	<b>鈴鹿工業高等専門学校</b>	<b>鈴鹿工業高等専門学校</b>	一一暁高等学校	三 三好高等学校	豊橋東高等学校	相山女学園高等学校	一岡崎聾学校高等部	一 不二聖心女子学院高等学校	一 浜松湖南高等学校	静岡雙葉高等学校	· 磐田北高等学校	一 不破高等学校	一 岐阜北高等学校	<ul><li>大垣南高等学校</li></ul>	<ul><li>大垣北高等学校</li></ul>	一 松本第一高等学校	一 松本第一高等学校	一 松本第一高等学校	一 長野市立長野高等学校	一 身延高等学校	者 写 高 冬 气 木
一年	二年	一年	二年	二年	二年	二年	二年	一年	三年	三年	二年	三年	一年	二年	二年	二年	二年	三年	二年	二年	一年	二年	一年	二年	一年	一年	一年	三年	_ 
青山茉由	片岡春香	細井颯汰	石原彩羽	阪下千聖	森本望月	藤橋小梅	木津七緒子	今井夏陽	山田りょう	間瀬萌々子	大川内理紗	兵藤 雅	田嵜七海	竹内加穂子	杉森 心	大津亜矢香	和田凜夏	杉山葵子	神原星来	恩田健佑	羽賀桃花	堀田うらら	谷口依里	宮澤京奈	山﨑梓暖	須々木望恵	松井 笑	望月奏汰	高 し 表 単
『命の授業』	命のカウントダウン	私は「平和」が嫌いだった	生きる力	ありのままの自分を魅せる	感謝状	逢いたい	人間の性質	「知る努力」と「する努力」	考えの違い	灰色の達成感	「死」と向き合う	栗の木と又三郎の精	『みんな』の中の『私』	弟へ、ありがとう	一歩踏み出せた私	彼らと私を継ぐもの	私たちは「健常者」と言えるのか	″日本のデザイン ″を見つめ直す	李徴と私、何が違う?	いただきますの重み	ジヨンから学ぶ生き方	信用される自分になるために	過去と現在と未来	泰然自若	共鳴	世界のために出来ること	障害者の本	完璧じゃなくていい	ララい原の一学館プログレー音楽と利し

	広島県				岡山県				島根県				鳥取県				和歌山県				奈良県				兵庫県				大阪府
私立	県立	国立	私立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	私立	県立	県立	私立	私立	私立	私立	私立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	県立	府立	府立	府立	市立
ノートルダム清心高等学校	大門高等学校	津山工業高等専門学校	創志学園高等学校	<b>倉敷商業高等学校</b>	倉敷天城高等学校	横田高等学校	松江南高等学校	津和野高等学校	大社高等学校	湯梨浜学園高等学校	鳥取東高等学校	鳥取西高等学校	鳥取敬愛高等学校	智辯学園和歌山高等学校	智辯学園和歌山高等学校	智辯学園和歌山高等学校	智辯学園和歌山高等学校	青翔高等学校	青翔高等学校	畝傍高等学校	畝傍高等学校	姫路西高等学校	飾磨工業高等学校	神戸高等学校	香寺高等学校	天王寺高等学校	天王寺高等学校	大阪南視覚支援学校高等部	大阪市立南高等学校
一年	三年	三年	一年	一年	二年	一年	二年	二年	一年	一年	一年	一年	二年	二年	一年	一年	一年	二年	一年	一年	一年	一年	二年	一年	一年	一年	一年	三年	一年
谷成葉	由藤一葉	大竹逸太	出射颯大	浅原杏奈	楠 琉々華	西村和華	永海知夏	池本次朗	江角麗南	久保田菜子	石原史子	岸本彩希	景山好羽	幸田愛子	峯 奈那	岡田華奈	井辺節子	飯田璃香	阿部空也	増田奈々	田中真衣	玉作青葉	蒲田一磨	足立遼太	神戸柚香莉	本田莉子	上阪千春	分部 元	下村天乃
いただきますの前に	「選ばれた人」にならないように	『コーヒーが冷めないうちに』を読んで	辞書について	向日葵を咲かせるために	私のヒーロー	生きる希望	自分改革	私と水墨画を繋いだ線	自分を変える	別れ	じーじと私	普通じゃなくてもいい	「普通」のありかた	イギリス、アメリカ、日本	居場所のはなし	青の方程式	自己犠牲の精神	精神のスポーツ	平和への決意を改めて	大切な存在	ピアノと共に	才能	気持ち	出会いと変化	ドブネズミみたいに	言葉の海を渡る	差別と分断を乗り越えて	行動する勇気	愛なき世界で恋をする

私立	県立	県立	佐賀県 県立 中	県立	県立	県立	福岡県 私立 世	県立っ	私立	私立	高知県 県立 六	県立	県立	県立	愛媛県 県立	県立	県立	市立	香川県 県立 -	市立	県立	県立	徳島県 県立 5	県立	県立	県立	山口県 県立	市立	
龍谷高等学校	鳥栖商業高等学校	鳥栖高等学校	唐津東高等学校	門司大翔館高等学校	東筑高等学校	修猷館高等学校	敬愛高等学校	高知農業高等学校	高知学芸高等学校	高知学芸高等学校	高知小津高等学校	松山東高等学校	松山西中等教育学校	新居浜西高等学校	伊予農業高等学校	丸亀高等学校	高松西高等学校	高松第一高等学校	高松高等学校	徳島市立高等学校	徳島北高等学校	徳島北高等学校	阿波高等学校	徳山高等学校	徳山高等学校	下関西高等学校	熊毛南高等学校	広島市立美鈴が丘高等学校	
一年	二年	二年	二年	二年	二年	一年	二年	三年	二年	二年	一年	三年	五年	二年	一年	二年	二年	一年	一年	一年	二年	二年	二年	二年	二年	一年	一年	二年	
内田真緒	伊東杏菜	藤井音	山添妃奈	岸本冬陽	杉山弥優	堺 乃亜	益戸美夢景	吉村愛里	上岡彩良	岩﨑凜乃	吉森夏実	内田実結	富岡珠里	堤 さと子	濱岡純平	林里奈	鎌田龍佑	中村瑞希	岡野明莉	野田あさひ	八木梨紗子	森 愛音	山本聖華	寄元海渡	宮川真衣	濵田真結	榊原僚希	荒井 優	11,000
他人の優しさに気付くとき	さがしもの	手紙が繋ぐもの	今という瞬間を生きる	学ぶということ	未来予想図	ピーター・パン研究家への道	虹の先にあるもの	私は私のままでいい	私が出会う人へ	生死の連鎖	家族とは	希望の扉	デュークの世界に憧れて	教えて!みすゞ先生	人の幸せは、命の長さではないのです	本当の世界を見るためには	書に生きる	チューバと私の森	いま、伝えたい	家族の大切さ	魔法をもとめて	作者のあの娘は「私」でもあった	私にとっての友達とは	成功するには	色~死という再生~	点燈夫との出会いと私の選択	一日を大切に	私の箱根駅伝	1

デザイン/テラ	イラスト/結布	
フエンジン	.,-	

長崎県	県立	壱岐高等学校	二年	白石萌恵	かがみとの対峙
	県立	諫早高等学校	二年	永武摩梨	自分だけの色に向かって
	県立	佐世保西高等学校	年	峰松 晏	スワイプ
	県立	猶興館高等学校	年	加藤凜華	私を変えてくれた一冊
熊本県	県立	宇土高等学校	年	加悦靖智	必要最小限の先に見えたもの
	県立	鹿本高等学校	年	松本 渉	夢への一歩
	県立	鹿本高等学校	年	森本貴幸	この夏、僕は変わった
	市立	熊本市立必由館高等学校	二年	津辻清花	「才能」に縛られない
大分県	県立	大分上野丘高等学校	二年	岡田真綾	進むために折れること
	私立	大分東明高等学校	年	杉安幸輝	母国では戦争があった
	県立	杵築高等学校	二年	田原綺乃	文字で伝える
	県立	芸術緑丘高等学校	二年	藤内花恋	学び、行きつく先は
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園聡明中学校高等部	二年	日髙 早	言葉の船を編む
	県立	都城泉ヶ丘高等学校	年	菊池京子	新たな時代と平和
	県立	宮崎大宮高等学校	年	福山凌右	園芸と私
	県立	宮崎南高等学校	二年	徳永陽子	みんなちがってみんないい
鹿児島県	市立	出水市立出水商業高等学校	三年	植崎詩菜乃	私だけの感性
	県立	鶴丸高等学校	年	田上 愛	「終末」から見えるもの
	県立	鶴丸高等学校	年	馬場大晟	本からあたえられた物
	県立	鶴丸高等学校	二年	永田昌吾	それを言葉にするということ
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	玉木日菜	音楽と向き合う
	県立	向陽高等学校	二年	津波さくら	森光子さんと出会って
	県立	向陽高等学校	二年	諸見里まこ	旅をする。
	県立	那覇国際高等学校	一年	徳元聖巴	『あと少し、もう少し』の先に見えたもの

http://www.hitotsubashi-bks.jp